

「魂」を詠む歌―「袖に包む魂」・「夢のたましひ」

―『古今集』時代の歌ことば表現の一考察―

佐 田 公 子

一 はじめに

人の魂とは、如何なるものであろうか。これは人類にとつても個々人にとつても永遠の謎であらう。

・「魂」は陽の氣に属し、「云」と発声する。「魄」は陰の氣に属し、「白」と発声する。（『説文解字』）

・「魂」は天に帰り、「魄」は地に帰る。（『礼記』）

・人が生まれる時、魄ができ、陽の「魂」がその中に入る。（『春秋左氏伝』）

左氏伝）

・「魂」に神、氣、陽、動、「魄」に靈、精、陰、静を当て、魂は遊散して、天に帰る。

魄は淪墜して、而して地に帰する。（『楚辭』）

など漢籍には「魂」は「魄」とともに様々に解釈されている。日本文学では、『万葉集』に「玉の緒」「珠衣」「たまはやす」「ぬばたま」など「魂」を掛けた言葉が散見できる。

平安文学で「魂」の歌と言えば、和泉式部の、

もの思へば沢の虫もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る

（『後拾遺集』神祇 一一六二）

をまず思い浮べる人が多いだろう。しかし、前述した万葉以来の枕詞の他にも魂（たましひ・たま）を掛けた歌ことばが多いことは、

『歌ことば歌枕大辞典』を見れば一目瞭然であらう。

本稿では、「歌ことば歌枕大辞典」で「魂」や「袖」の項目で触れられてはいるが詳述されていない『古今集』時代に成立した「袖に包む魂」の歌及び歌ことば「夢のたましひ」について検討し、合わせて『源氏物語』の引歌としての様相及び後代の和歌との関連を見ておくこととする。

二 「袖に包む魂」の歌

『源氏物語』「夕霧」の巻で、落葉の宮の裾を取り押えて一夜を明かした夕霧が、翌朝、落葉の宮に贈った文には、

たましひをつれなき袖にとどめおきてわが心からまどはるるかな

外なるものとはとか、昔もたぐひありけりと思たまへなすにも、さらに行く方知らずのみなむ。

（引用は「新古典文学全集」小学館による）とあった。夕霧の「たましひを」の歌は、『古今集』（雑歌下）

九九二番歌、

女ともだちと物語して、別れて後に、遣はしける

陸奥

飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する

を踏まえ、文面の「ほかなるものは」は、同じく『古今集』(雑歌下)

九七七番歌、

人をとほで久しうありける折に、あひ怨みければ、よめる

躬恒

身をすてて行きやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり

さらに「行く方知らず」は『古今集』(恋一)四八八番歌(題しらず

よみ人しらず)の、

わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

による引歌であることはよく知られている。当時の読者にも周知で

ある『古今集』の三首を短い文面の中に織り込んだ夕霧の文は却つ

て無粋で、後朝の歌や恋文を書き慣れていない夕霧の実直で堅物な

人柄を表していることになる。⁽⁴⁾

この『古今集』雑歌下九九二番歌は、『源氏物語』の「若菜下」で、

柏木が女三の宮と密通した後の別れの場面でも、引かれていること

もすでに指摘されている。

起きてゆく空も知られぬあけぐれにいづくの露のかかる袖

なり

と、ひき出でて愁へきこゆれば、出でなむとするにすし慰め

たまひて、

あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもや

むべく

とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。

一方的に逢瀬を求めた柏木は、一行に靡かない女三の宮に対して、行く先も分からずに明け方の薄暗がりに出てゆく自分の悲しみの涙を、袖を濡らす露に譬えて歌を詠む。一方、柏木が帰ってゆくことに安堵した宮はやつとの思いで、「明け方の空にわが身は消えてしまいたい、夢だっと思えるように」と儂げに詠み返すと、柏木の魂は身から抜け出て宮のそばに残つてしまふような心地だということである。恋のために身から魂が遊離して相手の所に留まるという柏木の歌は、先の『古今集』九九二番歌「飽かざりし」の歌とは反対の立場から詠った『古今集』「離別」部のよみ人しらず歌、

飽かずしてわかる、袖のしらたまをきみが形見と包みてぞ行く

(四〇〇)

からも影響を受けている表現と言える。⁽⁵⁾

柏木の密通の場面における『古今集』の引歌は、先に挙げた夕霧の落葉の宮への後朝の歌よりも深刻に機能している。魂の遊離が、身の破滅を導く結果になるからである。

ところで、このように『源氏物語』で引かれた『古今集』の四〇〇・九九二番歌は、そもそも『古今集』においてはどのような意義をもって収載されたのだろうか。また、『源氏物語』の作者がそれをどのような視点から引歌としたのだろうか。

筆者は、『古今集』の歌群生成要因と配列についてこれまで聊か考えてきたので、まず九九二番歌の『古今集』の配列における意味と「袖に包む魂」の歌を巡る表現について考察しておくこととする。

三 『古今集』雑歌下における九九二番歌の「飽かざりし」の歌の位置

『古今集』雑歌下九九二番歌「飽かざりし」の歌は、雑歌下の巻末から九首目にある。また、この歌の前には、

筑紫に侍りける時に、まかり通ひつゝ、碁打ちける人のも
とに、京に帰りまうで来て、遣はしける 紀 友則

ふる里は見しごとくもあらず斧の柄のくちし所ぞ恋しかりける

(九九一)

がある。

この友則の「斧の柄の朽ちし所」については、早くから『顕註密勘』が『述異記』の晋王質の所謂柯爛の故事（薪こりに山に入ったところ、二人の仙人が碁を打っていた。その一局を見ていたら、斧の柄が朽ちてしまい、帰宅すると元の人は皆いなくなっていた。）を挙げており、『古今集』以後「斧の柄」は歌語となつて和歌や日記・物語など後の平安文学にもたびたび引用された。一方、九九二番歌は、小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（岩波新日本古典文学大系一九八九年二月）が、『法華経』巻四の「五百弟子受記品」の一節を踏まえていることを指摘したことによつて、その歌の背景が明らかになつた。⁶⁾

その一節とは、「親友が友の衣の内に宝玉（仏性）を入れて官事のために酒宴の席を退出した。しかし、宝珠を買つた本人は酔つてそのことを忘れ、他国を放浪して困窮した。やっと宝珠を呉れた友人に再会することによつて、癡^{ちか}であつたことを悟され、宝珠を持つて安楽な生活を送つた」という話で、法華経七喻の「衣珠喻説話」、

「衣裏明珠」「衣裏宝珠」の逸話とも言われる。

したがつて、この九九二番歌の歌意は、「あなた（女友達）とお別れしてきましたが、『法華経』の喩のように、名残尽きないあなたの袖の中に私の魂（宝珠を掛ける）を入れてきたのでしようか。私の魂が全くなくなつてしまつたように呆然としております。」ということになる。

『古今集』の撰者が九九一・九九二番歌を並べたのは、九九一番歌が漢籍の故事から、九九二番歌が仏典から着想を得た歌で、二首とも別離によつて友情を確認し合う歌であつたことによる。また、この二首の内容は、京から離れていく人に贈つた歌を主に収載した「離別」部には収めることが出来なかつた歌であつたから「雑歌」に収載したとも言える。

ところで、当該二首の歌は、雑歌下の「宿」の歌群⁷⁾（九九一〜九九〇番歌）に続いて収められた歌である。その「宿」歌群の最後の歌で、九九一番歌の直前の歌は、伊勢の、

あすか河ふちにもあらぬわが宿もせに変わりゆくものにぞありける
(九九〇)

である。この歌は、「ふち」に「淵」と「扶持（舅姑の葬礼に対する妻からの援助）」を掛け、「せに」に「瀬」と「銭」を掛ける技巧的な一首ながら、内容は「世の中はなにか常なるあすか河きのふの淵ぞけふは瀬になる」を踏まえ、親から相続した家を売るといふ無常感を詠つた歌となつている。「宿」歌群の最後に当たる伊勢の歌の次に九九二番歌を置いたのは、九九二番歌が人の手に譲渡されていらない家でも久しぶりに訪れると、変わり果てて無常を感じるという意の歌であつたからであらう。

また、九九二番歌の次には、

寛平御時に、唐土判官に召されて侍りける時に、東宮の侍にて、男ども、酒賜べけるついでに、よみ侍ける

藤原 忠房

なよ竹の夜ながさうへに初霜のおきゐて物を思ふころかな

(九九三)

がある。この歌は、寛平六年(八九四)の遣唐使任命の時のもので、忠房が遣唐使の判官(三等官)に任命された名譽とともに、命懸けの使命を果たさなければならぬ複雑な心境を詠んだ歌である。但し、この時の遣唐使は菅原道真の建議によって中止となり、以後廃止となったから、勅撰集である『古今集』にも収載すべき歌であったと思われる。また、漢籍・仏典は唐から齎されるものである。よって遣唐使の歌を故事や仏典を典拠として詠んだ九九一・九九二番歌の次に置き、九九三番歌を含めた国史関連の歌(九九三〜九九七)に繋げたのである。

以上のように九九二番歌が、『古今集』(雑歌下)の所定の位置に収載された理由が確認できる。

四 「衣珠諭説話」を踏まえた『古今集』歌の諸相と「魂」の歌との関連

次に『古今集』成立以前で『法華経』「衣珠諭説話」を踏まえたものと思われる歌を見てみよう。まず挙げられるのは、安倍清行と小町の歌である。⁹⁾

下出雲寺に人の業しける日、真静法師の、導師にて言へりける言葉を、歌に詠みて、小野小町がもとに遣はせりける

安倍 清行朝臣

つゝ、めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

(恋二 五五六)

返し

小野 小町

をろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあはずたぎつ瀬なれば

(恋二 五五七)

詞書にあるように下出雲寺で導師であった真静法師の説法が『法華経』「衣珠諭説話」であったことは二首の応酬から明らかで、清行の「包んでも袖に溜まらない白玉はあなたに逢えない私の涙なのです。」という歌に対して小町が「真心を知らないあなたの涙が袖に玉を作るのです。私の涙は止まりません。沸き上がって急流になるのです。」と切り返した歌である。

また、「寛平御時后宮歌合」の興風の、

白玉のきえて涙となりぬれば恋しきかけを袖にこそみれ

(二一六〇)

がある。岩井宏子は「涙はなんといつても水分であることから、袖に溜まり、鏡の作用をなし、恋しい人の姿が見えると詠む。一方、〈玉の涙〉は元は白玉・真珠であることから、〈衣裏宝珠〉の説話を踏まえ、それ故に〈袖に溜まるのだ〉の意も込める。」と指摘する。¹⁰⁾この興風の歌は、先に挙げた安倍清行と小町の贈答表現を意識して詠んだものと言える。

また、二節で『源氏物語』の引歌として挙げた「離別」部のよみ人しらず歌、

飽かずしてわかる、袖のしらたまをきみが形見と包みてぞ行く

(四〇〇)

も九九二番歌との先後関係は定かではないが、『法華経』「衣珠喩説話」を踏まえていることは明らかで、いずれにしても、『法華経』「衣珠喩説話」が当時の和歌表現に浸透していた様相を見ることができ。このような「魂を包む」という表現は、『万葉集』には見当たらない。¹¹⁾

次に、『古今集』中で「袖に包む魂」「袖の魂」のように「袖」と関連なく「魂」を詠み込んだ歌を挙げてみよう。まず、

唐菽

よみ人しらず

空蟬のからは木ごとにとゞむれど魂の行方を見ぬぞかなしき

(物名 四四八)

のように蟬の抜け殻そのものを指す「空蟬」は、それが魂が抜けた状態で行方も分からないことを嘆いていることになる。また、「寛平御時后宮歌合歌」の一八七番歌で『古今集』にも採られた、
恋しきに侘びて魂まどひなば空しきからの名にや残られた、

(恋一 五七一 よみ人しらず)

も先述した『源氏物語』の例のように恋のために魂が遊離する現象を詠んでいる歌である。

また、『古今集』の墨滅歌の、

かけりてもなにか魂の来ても見む殻は炎となりしものを

(一一〇二 勝臣)

をがたまの木 友則下

は、四三二番歌「み吉野のよしのの滝にかびいづるあわをか玉の消ゆと見つらむ」の次にあつた歌が墨滅になったもので、魂が炎となる人魂を詠んでいる。

右のように『古今集』の「袖」とともに詠み込まれていない「魂」

の歌は、離魂によって、魂自体が行き先を決めかねてまどうことを歌っていると言える。

さて、このような魂の遊離の意味を持つ歌と『法華経』「衣珠喩説話」が結び付いたのが次の物名歌である。

空蟬

在原 滋春

浪のうつ瀨見れば珠ぞみだれける拾はば袖にはかなからむや

(四二四 物名)

返し

壬生 忠岑

たもとより離れて珠を包まめやこれなむそれと移せ見むかし

(四二五 物名)

四二四番歌では、「うつ瀨見」に「うつせみ」を、四二五番歌では、「移せ見」に「うつせみ」を掛けて「袖」が「たもと」となっているが、四二四番歌で「波の立つ浅瀨を見ると水の珠が乱れているが、それを拾ったら袖の中ではかなく消えてしまっただろうか」と言ったのに対して、四二五番歌では「袂以外でその珠を包めようか。包めない。これがその珠だよと移して見せてほしい」と答え、二首の底流には『法華経』「衣珠喩説話」がある可能性は高い。

ところで、『古今集』には、水流を白玉と見立てた歌や涙を玉と見立てた歌が多い。その中でも、

布引の滝にて、よめる 在原 行平朝臣

こき散らす滝の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

(雑歌上 九二二)

布引の滝の下にて、人々集まりて、歌よみける時に、よめる 業平朝臣

抜き見たる人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

の二首は、布引の滝の前で催した宴席で詠んだ時のものであると思われ。『法華経』『衣珠諭説話』も酒宴の途中で友の袖に珠を入れたという逸話であるから、右の二首も『法華経』『衣珠諭説話』を意訳して詠んだ可能性もある。

五 『古今集』 周辺に見える 『法華経』『衣珠諭説話』 関連歌

『古今集』歌人で『法華経』『衣珠諭説話』との関連の歌をよく詠んだのは、伊勢である。高野晴代は、『伊勢集』の次の二首を「衣珠諭説話」関連歌としている。まず、一首目は、藤原満子四十賀の折の屏風歌、

藻刈りたる海人

心して玉藻は刈れど袖ごとに光見えぬは海人にざりける

(七〇)

で、もう一首は、「春、もの思ひけるころ」という詞書を持つ歌の二首目の、

白玉を包む袖のみなかる、は春は涙のさえぬなるべし

(『伊勢集』一一四・『後撰集』春上 二〇)

である。高野は、次の物名の、

紫苑

うけたむる袖をし緒にてつらぬかば涙の玉も数は見てまし

(一三七)

には、「衣珠諭説話」の注は付していないが、「うけたむる袖」とあるので、これも四節で挙げた「寛平御時后宮歌合」の興風の「白玉

のきえて涙となりぬれば恋しきかげを袖にこそみれ」のように、「衣珠諭説話」を意識しながら「涙の玉」と表現したと考えてもよいと思われる。

その他、平安私家集の中から、「衣珠諭説話」を意識していると思われる歌を挙げてみよう。

いまはとてわかるそでのなみだこそくものたもとにおつるし
らたま (元真集 二六六)

ほしわぶるそでのなかにやとめてけんそれをぞたまのをにはよ
らまし (小大君集 五七)

十五日、月いといみしうすみてあかし、進のいとどしきそ
でにうつりて、たまのやうにみゆれば、宰相

あかずとふたまこそそでにかよふなれうはのそらなる月もいり
けり

進

人こふるそでにもるべきあふ事をなみだのたまのかずにいれて
ん (大斎院前の御集 二二〇～二二二)

などは、『法華経』『衣珠諭説話』から引き出されるキーワード「玉(白玉)」「袖」「袖の中」「別れ」「包む」「止める」などが詠み込ま

れているので、『古今集』九九二番歌から派生したバリエーション豊かな歌であると言えよう。特に「大斎院前の御集」の二二〇番歌

の上の句は、『古今集』の九九二番歌を本歌として詠まれている歌として注目される。

これらは、先の興風の歌(寛平御時后宮歌合)一六〇番歌)や
ひろへども袖のみぬれてとまらぬはたまと見えつるつゆにぞあ
りける

(恵慶集 九二)

のような袖の濡れる原因になる露を玉に見立てる表現や、

ふじころもはつるるそでのいとをよわみなみだのたまのぬくに
みだるる (相如集 九)

しらたまか涙かなにぞよひよひにはかるあたりのそでにこぼる
る (為頼集 四九)

しらたまは涙かなにぞよることにたるあひだのそでにこぼる
る (清少納言集 三〇)

などのような袖の露を涙の玉に見立てる表現は、『法華経』『衣珠喻説話』とはまた別の恋歌の類型を作っていたものと思われる。

このように見て来ると、先に掲げた『源氏物語』の柏木が女三の宮に向かつて詠んだ後朝の歌は、袖に溜まる涙の玉の露であり、夕霧が落葉の宮に向かつて詠んだ後朝の歌は、『法華経』『衣珠喻説話』を踏まえた『古今集』九九二番歌を本歌とした歌として作者が置いたものであったと言える。また、柏木が女三の宮と別れる時の「出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す」は、『法華経』『衣珠喻説話』とともに魂の遊離を詠った『古今集』の歌々をも踏まえたものとして作者が機能させたと考えられる。

六 「惑ふ魂」と「夢のたましひ」

ところで、『万葉集』には「惑ふ(迷ふ)」という語がしばしば見られる。

埴安の池の堤の隠り沼のゆくへをしらに舍人は惑ふ

(卷二 二〇一 柿本人麻呂)

月読の光りは清く照らせれど惑へる心思ひあへなくに

(卷四 六七一 作者未詳)

春山の霧に惑へる鶯もわれにまさりてもの思はめやも

夢にだに何かも見えぬ見ゆれども我かも惑ふ恋のしげきに
(卷十 春相聞 一八九二 作者未詳)

うつつにか妹が来ませる夢にいかも我か惑へる恋のしげきに
(卷十一 二五九五 作者未詳)

(前略) うちひさす 宮の舍人も 栲のほの 麻衣着れば 夢
かも うつつかもと 曇り夜の 惑へる間に (後略)
(卷十二 二九一七 作者未詳)

など「惑ふ」は、挽歌や相聞において「行く先を見定めかねて混乱する」「どうすればよいか決めかねて心が混乱する」の意であるのだが、「夢」は詠み込まれているものの、直接「魂」と結びついて詠まれているわけではない。

ところが、「寛平御時后宮歌合の歌」で『古今集』にも採られた、恋しきに侘びて魂まどひなば空しきからの名にや残らむ

(恋二 五七一 よみ人しらず)

の歌のように『古今集』周辺では、「魂」が「まどふ」と言う表現も、主に恋歌において散見できるようになる。

逢ふ事をいづくなりともしらぬ身の我がたましひの猶まどふか
な (寛平御時中宮歌合 二二八)

わが恋はしらぬ山路にあらねどもなたましひのまどひけぬべ
き

(新編国歌大観 貫之集 五七七 私家大成 貫之集I 「まどふ心そわひしかりける」)

ひとしれぬなかの女、をとこのつかさえてくだるにあはれ

き

と思ひて

たぐへやるわがたましひをいかにしてはかなきそらにゆきまど
ふらん (朝忠集 二一〇)

むすめは京にて、おやはひとのくにになるに

めにちかくつらきにまどふたましひをいとどはるかにたのめつ
るかな (元真集 二二七)

右の歌を見ても万葉歌と比べると、『古今集』以後では「たましひ」という言葉自体を意識的に用いるようになってきたことが分かる。これは、六朝・唐代の伝奇小説の影響を受け、恋い焦がれる魂が身から遊離する現象に関心が高まったからであろう。「夢のたましひ」という歌ことばは、その「たましひ」への関心から生み出されたことばであったと考えられる。

よひよひの夢のたましひあしたゆく有りてもまたんとぶらひに
こよ

(小町集 二一九・小大君集 一四四では、三句・四句目が「あしたかくありかدماتん」となっている。)

別後相思夢魂遥 (別れて後、相思ふ、夢の魂遥かなり)

別れにし君をおもひてたづぬればゆめのたましひはるかなりけり

(千里集 九六・赤人集 二二では、「別れにしときをおもひて」となっている。)

しきたへのまくらをだにもかさばこそゆめのたましひししたが
れせめ (素性集 三三五)

とり入れず返して、かくなるといひければ、かしこうして
またまた行きてみれば、三四日物もくはで物おもひければ、

いとくちをしういきもせず、いかがおはしますといひけれ
ば

消えはてて身こそはるかになりはてめゆめたましひ君にあひ
そへ (簞集 二二八)

きみこふるゆめたましひ行きかへりゆめぢをだにもわれにを
しへよ (元真集 二九七)

つらさのみまさりゆくかなおもひやるゆめたましひいかにつ
くらん (元真集 三二四)

右に見るように「夢のたましひ」は、自分が相手を思っている夢の中から遊離する魂、または相手が自分のことを思っている夢の中から遊離する魂の両様がある。目覚めている時よりも夢を見ている時のほうが魂は、身体から遊離しやすいからである。

この「夢のたましひ」は、「千里集」の句題に見るように「夢魂」の翻案と言える。千里集の句題の出典は不明だが、同様な表現は漢詩の中に見出すことが出来る。¹⁷⁾

天長路遠魂飛苦 夢魂不到関山難 (天長く路遠く魂飛苦し 夢魂到らず関山難きに) (李太白詩集卷二「長相思」)

夢魂雖飛來。會面不可得。(夢魂飛來すと雖も 会面得べからず。)

(李太白詩集卷十二) 夢魂歸未得。不用楚辭招。(夢魂歸するを未だ得ず。楚辭を用ひず招く。)

五年生死隔 一夕夢魂通 (五年生死を隔たり。一夕魂夢通ず。)

(『白氏文集』卷十 四六〇「裴相公を夢む」) 悠悠生死別經年 魂魄不嘗來入夢 (悠悠たる生死 別れて年を経たり。魂魄嘗て來たりて夢に入らず。)

〔白氏文集〕「長恨歌」

以上の例から見ても、「魂」や「夢魂」は自由に飛ぶことができ、相手の夢に現れるのだが、それが本当にその人の夢に現れたか否かが詠われることが多かったと言える。¹⁸⁾

ところで、このような詩語に見られる「夢魂」は、もともと仏典の言葉であった。「長恨歌」の「魂魄」を引くまでもないが、仏教でも「人が生きている間は魂魄はその身体に留まっているが、死ぬと身体から遊離して、魂は天に帰り、魄は地に帰る」と考えられていた。¹⁹⁾

「夢魂」を大正新脩大蔵経データベースで検索すると二十件あり、諸宗部・史伝部・統諸宗部に集中している。また、中華電子佛典協会で検索すると四十二件の例がある。それらの中から夢魂の特色を探ると、夢魂は深々した処に常にあるが、睡眠中に夢魂が遊離し、万里を飛び遊び、時には鏡の中の人に対することもある。また、夢魂は、地にはなく、曉に多く出、連なっている場合もある。中には「莊子」の「蝴蝶の夢」に匹敵する例も散見できる。

したがって、こうした夢魂の特性が中国漢詩に詠み込まれ、それを享受した小町や千里が「夢のたましひ」という歌ことばを生み出したと推測される。

しかし、この歌ことば「夢のたましひ」は「袖に包む魂」の歌と比べると、後代まで続かなかった。「夢のたましひ」に近い歌としては、

よひよひはわすれてぬらん夢にだになるとをみえよかよふたましひ
(拾遺愚草 五七六)

があり、また、蘆庵の、

をしみかねまどろむ夢のたましひや花の跡とふこてふとはなる

(六帖詠草 一六六九)

があるが、この歌は『莊子』の「蝴蝶の夢」を踏まえていると思われる。このように歌ことば「夢のたましひ」が後代まで詠み継がれなかったのは、「夢のたましひ」を含む歌が『古今集』に収載されなかったことも関連しよう。また、和泉式部の「沢の螢」の歌に先立って貫之も、

夏の夜はともすほたるの胸の火をおしもだえたる玉とみるかな

(古今六帖 四〇二二)

と詠んでいたように、螢の方が遊離した魂の具象化として恰好の歌材となったからであろう。

また、和泉式部が、

よひのまあひて物などいひたる人のもとより、つとめてい

ひたれば、

人はいさわがたましひははかまなきよひの夢ぢにあくがれにけり
(和泉式部統集 四〇六)

と詠んでいるように、遊離する恋の情熱を表出するには、「あくがれ」という語が必要で、歌ことば「夢のたましひ」だけでは、物足りなかったからではないかとも思われる。

それに対し、「袖に包む魂」の歌は、『法華経』を典拠にしていること、また『源氏物語』の引歌として用いられたことなどから、

たましひは君があたりにとめてきぬわすれむほどにおどろかせとて
(九条右大臣²²⁾ 一五)

たましひの入りし袖の匂ゆゑさもあらぬ花の色ぞかなしき

(拾遺愚草 二五七六)

袖のうちには我がたましひやまどふらんかへりていける心ちこそ
せぬ (風葉集 九二八〇有明の別れ 五三三)

袖浦

たましひは中にや入りし袖のうらあかぬひとはなみのまくら
に (雪玉集 五一八一)

たましひの入野のすすき初尾ばなわがあかざりしそでとみしよ
り (晩花集 二〇五)

別れこし袖の中なるたましひは今も又ねの床にかへらじ

(新明題集 三四九三)

など、後代にまで詠み継がれている。

なお、平安中期から、

思ふにもいふにもあまる事なれやころもの玉のあらはるるひは

(伊勢大輔集 九七)

さががた御法の花に置く露ややがて衣の玉となるらん

(康賢王母集 一五〇)

のように歌ことば「ころものたま」が成立したのも『法華経』「衣
珠喻説話」に拠る。

以上、『古今集』成立前後の歌から魂に関する「袖に包む魂」の
歌と歌ことば「夢のたましひ」を追ってきた。何れも離魂への関心
が高まってきたこと、また、歌ことばの生成に仏典が関与していた
ことの証左にはなる。そして、それが初の勅撰集に採られたか否か
によって、また、『源氏物語』に反映されたかによっても、後代へ
の影響が異なることを如実に示している例と言えよう。

注

(1) 遠藤寛一「魂魄の思想と文学」(『江戸川女子大学紀要』十一号
一九六三年三月)には漢籍及び『万葉集』の例が詳細に検討されている。

(2) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 平成
十一年五月)

(3) 伊井春樹編『源氏物語引歌索引』(笠間書院 昭和五十二年九月)では、
『古今集』九二二番歌の引歌として他に、「末摘花」「閨屋」「若菜下」「浮
舟」の四箇所地の文を指摘している。但し、和歌では、「夕霧」の当
該歌のみである。

(4) 伊井春樹編『源氏物語の鑑賞と基礎知識』(至文堂 平成十四年六月)

(5) 高田祐彦「柏木の離魂と和歌」(『日本文学』四八巻二号 平成九年二
月)氏は、「浮舟」で匂宮が浮舟と契りを交わした後、宇治の邸から出
て行く時の語り手の表現として「出でたまひなむとするにも、袖の中に
ぞとどめたまひつらむかし」をも挙げて論じている。離魂への関心は、
六朝・唐代の伝奇小説の影響ももちろんある。

(6) 『法華経』巻四の「五百弟子受記品」の岩波新古典文学大系『古今和
歌集』における指摘は、新井栄蔵「おろかなる涙」をめぐって―古今
和歌集考―(『仏教文学』一三 平成元年三月)・中野方子『平安前期歌
語の和漢比較の文学研究―付 貫之集歌語・類型表現事典』(平成十七
年一月)第五章第一節「法会の歌」・岩井宏子『古今の表現の成立と展開』
(和泉書院 平成二十年九月)第二章第五節「涙の玉」考」などに発展
的に論及されている。

(7) 拙稿「『古今集』における宿の歌について」(『東洋女子短期大学紀要』
三十二号 平成十二年三月)

(8) 岩波新古典文学大系『古今和歌集』における雑歌下の歌群分類による。
注(6)の前掲書。

(9) 注(6)の前掲書。

(10) 注(6)の岩井宏子前掲書。

(11) 注(1)遠藤寛一前掲論文。注(6)岩井宏子前掲書。また、『万葉集』にお

いて「魂」を詠んだ歌には、狭野弟上娘子が中臣宅守を思つて詠んだ歌、たましひはあしたゆふべに賜ふれど吾が胸痛し恋の繁きに（巻十五三七六七）

があり、この魂は、「中臣宅守が狭野弟上娘子を思う心」であると解されてゐる。

また、よく引き合いに出される「人魂」では、難読歌の、

人魂のさ青なる君がただひとり逢へりし雨夜の葉非左し思ほゆ（巻十六 三八八九）

がある。（結句「葉非左し思ほゆ」は難読箇所）「怕しき物の歌」の中の一首で、『瑠玉集』に「恠異篇」、また類書に「怕物篇」とあるものの影響により編まれたと言われている。

(12) 上代での「うつせみ」は「現身」、「うつしおみ」で、「うつそみ」から「うつせみ」に転じた語。現世、人の世の意味で用いられ、はかないイメージはなかった。

(13) 注(6)の岩井宏子前掲書。

(14) 高野晴代校注『伊勢集』（『和歌文学大系18』）所収 明治書院 平成十年十月）引用本文も同書による。

(15) 注(6)の岩井宏子前掲書では、伊勢が長恨歌の屏風を見て詠んだ歌「かへりきて君をおほゆるはちすばに涙の玉とおきゐてぞみる」が歌語「涙の玉」の初例で、特に古今集歌人に用例が集中していると述べる。筆者が『源氏物語』頃までの例を確認すると、貫之・師氏・元輔・馬内侍・赤染が各一首、和泉式部五首となる。

(16) 大野晋・佐武明広・前田金五郎編 岩波『古語辞典』（昭和四十九年）

(17) 平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』風間書房（平成十九年二月）では、『李太白詩集』巻二「長相思」、「杜少陵詩集卷」二十三「帰夢」、「白氏文集」巻十二「長恨歌」の「悠悠生死別経年。魂魄不曾来入夢」を引くが、本稿ではその他の詩も挙げた。

(18) 「魂夢」の例もある。宗詩だが、「嫁来不省出門前 魂夢何因識酒泉（嫁来たりて門前を出るを省みず。魂夢は何に困りて酒泉を識る）『凌放翁詩鈔』・「吾行正無定。魂夢豈忘帰」（吾行正に定無く 魂夢豈に帰るを忘れんや）『宗詩別裁集』五言律」などがある。

(19) 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編 岩波『仏教辞典』（平成元年十二月）

(20) 大正新脩大藏経データベース研究会

(21) C B E T A 中華電子佛典協會

(22) 「九条右大臣師輔集」は、『源氏物語』成立以前であるから『法華経』「衣珠喻説話」を典故としている。

*『万葉集』は伊藤博校注の角川文庫（昭和六十三年五刷）に拠る。『古今集』は岩波新古典大系を用いた。また『万葉集』の場合と同様に一部送り仮名を改め、漢字を宛てた。逆に漢字を平仮名にしたものもある。その他の歌は、本文について注で特に断っていない限り『新編国歌大観』に拠った。『新編国歌大観』にない歌は『私家集大成』の本文に拠った。